EXPO 2005だより

EXPO NEWS

Vol. 2

第2号

◎1998年（平成10年）12月10日号

魅力ある21世紀の博覧会へ向けての構想案発表

博覧会協会では、2005年日本国際博覧会の会場計画案ほかの構想案について、コンセプト・会場計画・環境の各プロジェクトチームにおける検討状況を発表しました。二〇〇〇年六月のBIE（博覧会国際事務局）登録を目指し、博覧会の基本理念に沿って、楽しく有意義で、かつ合理的な博覧会の実現に向け、準備作業がいよいよ本格的に動き出しました。

基本テーマ
『自然の叡智』 Nature's Wisdom

生命の内側から人間の営みをとらえ直してみる、というのが2005年日本国際博覧会の一番のテーマです。自然の内部にひそんでいる叡智を掘り起こすことによって、もう一度人間のわざのすべてを、正しい道筋に連れ戻したいという願いがここには込められています。

12の森構想

このテーマをわかりやすく、楽しく、また深く理解してもらうために、それを「12の顔をもった森」として、創造してみようと考えました。

瀬戸の森の中に生まれるこれら12の森が、互いに響きあいながら、そして参加する人みんなが、「なぜ?」「ホォーッ」「最高!」と声を上げて感動しながら、しだいに中心テーマへと近づいていくような仕組みになっているのです。

12の森のうち、2つの森について紹介します。

① 美の森
② 共創の森
③ 大地の記憶の森
④ 生命の森
⑤ 学びと遊びの森
⑥ 技芸（技術）の森
⑦ 聖なるものの森
⑧ 廃墟の森
⑨ 共鳴の森
⑩ 情報の森
⑪ 宇宙の森
⑫ 資源と環境の森

大地の記憶の森

文字通り「生命の内側から」、この地球と生命の歴史をたどる森です。この森に入っていくには、まず私たち自身が、鳥や魚や古代の巨大爬虫類の目になって、空中や海中を探り、自然を体感するという、楽しいそして驚くべき体験を通過しなければなりません。

そして降り立ったところには、生命の太古の記憶を保存した、見たこともない自然史博物館が出現します。太古からの足跡と私たちの想像力の結合が、この森を造り上げていきます。

技芸（技術）の森

技術が自然と対立していた時代は、21世紀には終わりを告げなければなりません。より繊細な技術、より複雑になった技術が、「テクネー（技術の語源になった古代ギリシャ語で、自然の奥に隠れているものを外に引き出すわざ、という意味）」と自然との、新しい関係を生み出すことが出来なければなりません。

自然と技術の間をつなぐものは、「美」の現象です。人間が近代技術の以前に、「技芸」をとおして表現しようとしていたものを、よみがえらせようとする森なのです。

ソフトプログラムの検討状況について

博覧会協会では、博覧会の全体構想の一環であるソフトプログラムについて、コンセプトプロジェクトチームを中心に検討しています。これまでの検討状況について紹介します。

ここでは、テーマである「自然の叡智」に至る12の切り口を提示しています。

博覧会で展開される具体的展示、催事などについて、各国政府や企業および市民団体などの多様な参加も含めて、全体として統一感をもった形で構成していくことを目指そうとするものです。

会場計画の検討状況においては、地形を生かした「トポス型建築」、屋上部分を広場空間（トポス広場）とすること、また、自然の中に開かれた屋外型展示空間（領域型展示空間）を設けることを提案しています。会場地の里山としての自然という特徴も踏まえ、今後「12の森の構想」は、これらの具体的空間構成と整合した形で検討していくべきものです。

今回紹介した考え方は、企画調整会議およびコンセプトプロジェクトチームとしてまとまったものではなく、現時点においての検討段階のものであり、議論されている途上のものです。

各方面の皆さんより広く意見を伺い、さらなる検討を進めていきます。

2005年日本国際博覧会

●会場●
愛知県瀬戸市南東部

●開催期間●
2005年3月25日〜9月25日

EXPO 1998 LISBOA

リスボン博覧会閉幕

1000万人を超える入場者

成功裏に閉幕したリスボン博会場

五月二十二日から九月三十日まで、ポルトガルの首都・リスボン市で国際博覧会が開催されました。

国際博覧会条約上、初めてポルトガルで開催されたリスボン博には、百四十八カ国と十三の国際機関が参加しました。入場者数は一千万人を超え、これはポルトガルの人口を上回る記録的な数でした。

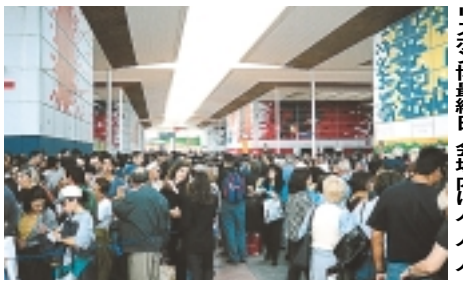
テーマである「海洋〜未来への遺産」は、ポルトガル人、バスコ・ダ・ガマのインド航路発見五百年を記念し、人類と海の関係を振り返り、また未来に向けて、人類にとって貴重な環境である「海」をどのように次の世代に引き継いでいくかを考えるというものでした。

会場で特に人気が高かったのは、主催国ポルトガルの「海洋館」（ヨーロッパ最大の水族館）、「海の知識館」「未来館」などのテーマ館でした。日本館もドイツ館、スペイン館などと並んで健闘し、入館者数ベスト5に入りました。

今回のリスボン博の大きな特徴のひとつは、副都心再開発計画と博覧会との連携です。会場となった、大西洋にそそぐテージョ川の河口に位置する六十ヘクタールの土地は、過去の産業の遺物による汚染地域といわれ、使用されなくなった石油化学工場や食肉加工場、廃棄物置き場などがあり、悪臭を発生することもあってリスボン市民から敬遠される場所でした。

ここを新しい機能を持つ副都心として生まれ変わらせるプロジェクトが検討され、その発展の第一段階が博覧会会場としての利用でした。したがって博覧会終了後は、水族館、博物館、国際見本市会場、政府官庁建物、民間住宅など、かなりの施設が恒久利用されることになっています。

博覧会をきっかけに建設された地下鉄新線やテージョ川にかかるバスコ・ダ・ガマ橋などのインフラ設備とともに、以前の姿からは想像もできない明るい場所に変身した博覧会会場は、新しい社会資本としてポルトガルの発展に寄与することでしょう。



リスボン博最終日。会場内は人、人、人。

リスボン博のマスコット・ジル君

◎第一回幹部会を開催

準備状況の概要を説明

あいさつする与謝野通産大臣

博覧会協会の第一回幹部会が十一月二日、東京都内のホテルで開催されました。この幹部会には、博覧会協会会長の豊田章一郎トヨタ自動車会長はじめ、副会長の今井敬経団連会長、根本二郎日経連会長、鈴木礼治愛知県知事ら二十人余りと、来賓として与謝野馨通産大臣が出席しました。

はじめに豊田会長が、「経済状況はたいへん厳しい。この機に博覧会を企画、実行することは、わが国が活力を取り戻す大きな契機になるといえます。博覧会を成功させるためには、皆さまの絶大なるご支援が不可欠です」とあいさつしました。つづいて与謝野通産大臣から、「環境・エネルギー問題などは人類共通の課題です。これらを取り上げる問題提起型のこの博覧会には重要な意味があり、政府としても全力をあげます」とあいさつがありました。

議事に入って、黒田眞事務総長がこの一年の取り組み状況や今後のスケジュールを説明。中でも二〇〇〇年六月のBIE（博覧会国際事務局）登録に向けてこれからの一年間に、かなりの事柄を決めなければならない、と述べました。

つづいて企画調整委員が、今回の博覧会について、①従来と違った博覧会とする②実験の場・発信の場・参加の場である③一過性のイベントとしない――という、三つの基本的な考え方を説明しました。また会場計画の検討状況についても、スライドで説明しました。

幹部会のメンバーからは、「日本古来の伝統、日本の良さを盛り込んでほしい」「アジアの関心を高めるために、検討メンバーに加えてはどうか」などの意見が出ました。

会議終了後の記者会見で豊田会長は、「国家プロジェクトとして、より多くの方々からご意見をいただきながら、来場した皆さんに『来て良かった』と思ってもらえる博覧会にしていきたい」と述べました。

アイ・ラブ・リスボン！

〜リスボン博派遣職員リポート

今年四月、一商社より博覧会協会に出向し、博覧会について何も分からないまま荷物をまとめ、リスボン博の日本館に勤務することになりました。

日本館では、日本にとって最初の西洋となったポルトガルとの出会いのコーナーを皮切りに、日本人と海との深いかかわりを文化・交流・技術・環境など、さまざまな角度から紹介しました。また2005年日本国際博覧会PRコーナーもありました。

リスボン博は、☆会期中の九五%が快晴☆市内に遊園地や動物園などの娯楽が少ない☆経済成長率が年三%を超えるポルトガルの景気――という、「天、地、時」の好条件に恵まれました。その結果、国内人口を上回る一千万人の入場者を記録しました。日本館もベスト5に入る人気館で入館者は約百六十八万人に上りました。待ち時間も最大三時間ほどで、館のまわりで七夕祭りや折り紙教室といった日本文化の紹介も行い、たいへん喜ばれました。

会期中には、「日本人はクジラを食べる民族」として抗議されたり、漏水による十トンもの水をバケツリレーで汲み出したりしました。また、暑さで倒れた人の介抱や米国のテロリスト基地爆撃の余波による緊張感など、いろいろなことがありました。

しかしながら、最後に心地良い疲労感を残すことができたのは、日本人スタッフのみならず現地スタッフとのチームワークや観客、特に子どもたちの笑顔と好奇心に満ちた瞳のおかげであったと思います。

常に、賛否両論ある博覧会ですが、その成果は次の世代までに必ず出てくると思います。最後に一句。

「残すまい、しこり、借金、ゴミの山」

（博覧会協会国際部・山中健次）

リスボン博を振り返って

リスボン博日本館館長・岩本守さん

左端が岩本館長

私にとってリスボン博は、沖縄海洋博以来の博覧会関係の仕事でした。

リスボン博のテーマ「海洋〜未来への遺産」に沿って、各国は、海にかかわる伝統文化、技術の展示・紹介をはじめ、情報・意見交換の場をつくりました。

リスボン博の特徴は、テーマが環境そのものであったことです。たとえば、主催者側にも「グリーンピース」の広報船に特別寄港してもらい環境について観客とともに考えよう、という姿勢が見られたように、会場全体が環境について展示し、情報発信する場でありました。

日本館では、日本と海とのかかわりを五つのゾーンに展示したほか、日本船三隻の特別寄港、三つのセミナーの開催や瀬戸子ども和太鼓をはじめ、数多くのイベントを通して日本を紹介することができました。

2005年日本国際博覧会の展示も日本館の人気コーナーでした。天皇、皇后両陛下が日本館をご覧になった際には、瀬戸市の「国際博覧会を成功させる作家の会」の皆さんが、リスボン博を祝うために海をテーマとして制作した陶板が、陶磁器に造詣の深いポルトガルの人たちに、大変感動されている旨、ご説明しました。

博覧会は人種やことばの違いを越えて、人々が集い、共通のテーマをベースに交流する「人類共通の遺産」であることを、あらためて認識しました。

第一回デザイン専門委員会を開催
基本理念に沿ったデザインの方向性などを検討

博覧会協会のデザイン専門委員会とアドバイザーの第一回合同会議が、九月七日、協会東京事務所で開催されました。

デザイン専門委員会は、博覧会の視覚的、デザイン的な質の向上、統一性などを図るための方策や、それに基づいたポスター、カレンダーなどの広報制作物の作成などをタイムリーに検討するために設置したものです。委員は各分野の第一線で活躍されている方々（五人）とコンセプトプロジェクトチームの委員（四人）で構成されます。

デザイン専門委員会アドバイザーは、デザイン専門委員会に対して、大局的見地から助言していただくために設置したもので、各分野で豊富な実績がある方々四人で構成されます。

会議では、はじめに委員長として、伊藤俊治委員が選出され、続いて博覧会のコンセプトを中沢委員、隈委員、伊藤委員長からご説明いただき、それに沿ったビジュアル・アイデンティティー（VI）をどのように進めていくかなどが話し合われました。

各委員やアドバイザーからは、「基本理念は読んでもピンとこない。絵や形で表現すれば分かりやすくなる」「いろいろ理屈で言われるよりは、視覚に訴える方が気持ちに訴えることができる」「分かりにくいものをどう浸透させていくかが課題。新しいことをやっていることを伝えることが重要」「全体を統一したイメージで進めていくことが必要」「VIについても従来型ではない新しいVIを提案して行くべき」「『自然の叡智』というテーマに密着した新しいVIを作る仕組みが出来てくれば、問題提起型、実験型、参加型という特徴につながっていく」「テーマをビジュアルなイメージとしてうまく発信して、それ自体が博覧会のビジョンづくりとなっていくことが重要」「オリンピック、万博などのポスターは、デザイン史的に大きな意義がある。方針をきっちり決めて進めて行くべき」「シンボルマークは今までのデザイン美学にとらわれないマークを作るべき」など、活発な議論が行われました。

今後、「自然の叡智」というテーマを深めていく議論を重ねつつ、視覚的なものを通して、新しさ、楽しさが伝わるように検討が続けられます。

注ビジュアル・アイデンティティー（VI）
デザインによる視覚統一。当博覧会においては、その基本理念や目的を視覚的に統一されたイメージで表現していくことをいいます。

左から伊藤委員長、アドバイザーの永井氏、田中氏、岡本氏、天野氏。

デザイン専門委員

伊藤俊治（多摩美術大教授）、大貫卓也（アートディレクター）、河原敏文（コンピュータグラフィックスデザイナー）、隈研吾（建築家）、中沢新一（中央大教授）、野田秀樹（劇作家）、原研哉（アートディレクター）、日比野克彦（アーティスト）。

デザイン専門委員会アドバイザー

天野祐吉（コラムニスト）、岡本滋夫（グラフィックデザイナー）、田中一光（同）、永井一正（同）。

（五十音順、敬称略）

EXPO 2005 市民シンポジウムを開催

平成11年1月19日

野中ともよ さん

平成十一年一月十九日午後七時から八時三十分まで、愛知芸術文化センター・アートスペースで「人と技術と地球の明日～あしたのために、いま考えよう」をテーマに市民シンポジウムを開催します（主催：2005年日本国際博覧会協会、中部産業活性化センター）。

出演は、コーディネーターにジャーナリストの野中ともよさん、パネリストにトヨタ自動車プリウス開発元チーフエンジニアの内山田竹志さん、博覧会協会企画運営委員で名古屋工業大学教授の若山滋さん、同委員で中部リサイクル運動市民の会代表の萩原喜之さんです。

また当日、会場に隣接した展示スペースでは、EXPO2005情報発信スペースのほか、市民グループからの提案展示やリサイクル工作展、小中学生の皆さんからのEXPO年賀状展示、中部産業活性化センターの「テクノ・ノバ」構想などを紹介します（午後五時から八時三十分まで）。入場無料。

シンポジウムの参加申し込みは、住所・氏名・年齢・電話番号――を記入し、ハガキかファクスで博覧会協会「シンポジウム係」（〒460＝0001名古屋市中区三の丸二丁目6―1☎052＝950＝2685・FAX950＝2684）へ。二百八十人。先着順。

EXPO年賀状募集

対象は小中学生。テーマは「わたしが描くEXPO2005」。抽選で百人に記念品をプレゼント。

【あて先】住所・氏名・学校名・学年・電話番号――を記入し、博覧会協会「EXPO年賀状」係へ。締め切りは平成十一年一月十二日。

MESSAGE 委員からのメッセージ FOR YOU

博覧会協会では博覧会の企画・運営についてご意見を伺うため、さまざまな分野の専門家の皆さんに初期段階から計画の作成に委員として参加していただいています。このコーナーでは、委員の皆さんに博覧会に対するご意見をいただきます。今回は、企画運営委員で会場計画プロジェクトチームのリーダーでもある建築家の隈（くま）研吾氏に登場していただきます。

隈　研吾氏

人と森との再接合をめざす

自然と人間との間に、新たなインターフェイスの形式を構築できるか否か…。私たちは、今その瀬戸際に追いつめられているような気がします。

西欧の建築は、基本的に自然と人間を切断することを目的として建築されています。いわば、建築は自然から人間を守るシェルターなのです。一方、日本人はかつて、自然と人間とを接続するための、さまざまなインターフェイスを発想し、洗練させてきました。里山もひとつのインターフェイスであり、日本の建築の目的もまた、自然と人間との切断ではなく、自然と人間とをやさしく、やわらかく接合することでした。

この美しい伝統は、二十世紀に失われました。里山は荒廃し、日本の伝統的建築の知恵も失われました。二十世紀アメリカ製の郊外住宅は、自然と人間を切断するハコモノであり、ハコモノ型郊外住宅とハコモノ型公共建築が日本を席巻してしまいました。

今回の博覧会のテーマは、自然と人間とのインターフェイスを回復することです。これに失敗すれば、二十一世紀の日本人は、そして人間は、自然を喪失したままで終わるでしょう。そのテーマを実現するためには、まずパビリオンというハコモノを否定する事にあります。あのハコの中で、いかに自然をテーマにした映像を流しても、何の意味もありません。あのハコをいかに土でおおい緑でカバーしたところで、何の意味もありません。

ハコを否定し、森の中に人間と自然が接触する、やわらかく繊細な界面（インターフェイス）を構築することが必要なのです。そのためにトポス型と領域型という、ふたつの空間を提案したいと考えています。

トポス型は、建築物自体で地形を作るという考え方です。既存の自然と建築による地形とがひとつに融合します。領域型は、屋外の空間がそのまま展示や体験の空間になるという考え方です。

建築物を作らなくても、人間はいくらでも豊かな体験ができるはずなのです。このふたつの提案によって、人間と森とが再接合されるのです。その時、人類が博覧会というイベントに対して抱いていたイメージも大きく転換することになっているかもしれません。

EXPO2005クイズ

2005年3月25日から9月25日まで、愛知県瀬戸市で開催される日本国際博覧会のテーマは「新しい地球創造～○○の叡智（えいち）」です。○○に入る漢字は何でしょう。

◆答えのわかった方は、はがきに、①クイズの答え②住所③氏名④年齢⑤電話番号⑥アンケートの回答――を記入し、次のあて先までお送りください。

QUIZ

[アンケート]

Q1 この「EXPO2005だより」をどこで入手しましたか？

Q2 今までに、どんな博覧会に行きましたか？

●あて先／〒460-0001　名古屋市中区三の丸二丁目6―1　（財）2005年日本国際博覧会協会「EXPO2005クイズ」係

●締め切り／平成11年2月28日（必着）
抽選で10人に記念品をプレゼントします（発表は、記念品の発送をもってかえさせていただきます）。

EXPO 2005 TOPICS

EXPO 2005 トピックス

EXPO2005この1年

1998年

1月23日　国際シンポジウム「新しい地球創造・その地域開発的戦略」を名古屋で開催（国連地域開発センター、名古屋市ほかとの共催）。

1月28日　第1回市民シンポジウム「みんなで語ろうEXPO2005」を名古屋で開催。南山大学・安田文吉教授の講演とパネルディスカッション。

2月18日　博覧会協会の企画運営委員会等の企画運営体制を発表。「EXPOの耳」開設。

3月7日　愛知県シンポジウム・マラソン「21世紀〜情報と博覧会」を豊橋で開催。

3月15日　第１回国際シンポジウム「どうデザインするか2005年日本国際博覧会」を東京で開催。東京大学・月尾嘉男教授をコーディネーターにパネルディスカッション。

3月25日　インターネットにホームページ開設。

4月17日　環境影響評価実施計画書の縦覧開始（５月18日まで）。

5月19日　「EXPO2005地球市民の会」設立。

5月22日　リスボン博覧会開幕。日本館に「EXPO 2005 PRコーナー」を出展（９月30日閉幕）。

6月12日　博覧会開催までの残り日数を表示するカウントダウンボードを名古屋と東京に設置。
「EXPO2005ゆめ作文」優秀作品を表彰。
「EXPO2005だより創刊号」発刊。

6月14日　犬山市・リトルワールドで「集まれ！地球市民」（EXPO2005地球市民の会主催）開催。

7月12日　市民フォーラム「2000年オークランドから2005年愛知へ」を名古屋で開催。アメリカズカップ「ニッポンチャレンジ」のピーター・ギルモア艇長のトークショーなど。

7月17日　第５回企画調整会議開催。会場計画の検討過程を公表。

7月19日　愛知県シンポジウム・マラソン「松本零士、秋山豊寛が語る夢・宇宙・未来」を名古屋で開催。

8月4日　第１回環境影響評価アドバイザー会議開催。

10月8日　ＢＩＥフィリプソン議長とロセルタレス事務局長が来日。「EXPO2005への期待」などについてスピーチ。

10月24日　愛知県シンポジウム・マラソン「中村征夫が語る夢・海・未来」を春日井で開催。

11月2日　第１回幹部会開催。与謝野通産大臣出席。終了後、豊田会長の記者会見を実施。

11月30日　「2005年日本国際博覧会愛知推進協議会」設立。

瀬戸市役所にカウントダウンボードがお目見え

「博覧会開催まで２３４５日」――博覧会協会設立一周年の十月二十三日、瀬戸市役所の正面に博覧会開催日までの日数を示すカウントダウンボードがお目見えしました。

縦一・五メートル、横四メートルのこのボードは、瀬戸・瀬戸北両ロータリークラブが地元のムードを盛り上げるために、瀬戸市に寄贈したものです。電源はボードの上のソーラーパネルから採り、衛星からの時刻誤差修正システムにより、開幕までの日を正確に刻んでいきます。

点灯式には、井上博通瀬戸市長やロータリークラブ関係者をはじめ、約百五十人が出席。井上市長は、「このボードの設置を、万博ＰＲにつなげていきたい」とあいさつしました。

「ASIA MUSIC EXPO 98」で博覧会をPR

十一月十三日、名古屋市・レインボーホールで開催されたこのイベントは、音楽を通じてアジア各国と日本の交流を目的とした博覧会を支援するものです。

出演は、シャ乱Ｑ、Ｆａｖｏｒｉｔｅ ｂｌｕｅ、平家みちよ（以上日本）、クリスティーナ（タイ）、スージー・カンリザ（マレーシア）、シティ・ヌハ（韓国）。博覧会のＰＲビデオ映像が大型プロジェクターに写し出された後、花火の爆音とともにコンサートが始まりました。すばらしい歌と演奏に、会場は感動に包まれました。

（中部電力主催）

「LEEO MUSIC CAMP 98」で博覧会をPR

ＬＥＥＯとは、リトルワールド・エスニック・アンド・アース・オーケストラの略称で、博覧会までの七年間で市民参加による世界民族楽器オーケストラを結成し、地球市民の交流を目的としたものです。

十一月十五日に犬山市・リトルワールドで記念のコンサートが開催されました。音楽家・久米大作氏プロデュースによるこのオーケストラは、洋楽器の基本ユニットに世界の民族楽器を加えて編成され、数々の楽しいポピュラーソングを奏でてくれました。

（名鉄グループ主催）

「みえ歴史街道フェスタ」で博覧会をPR

十月十日から十一月八日まで、三重県下の十八の街道をテーマに三重県内各地で、さまざまなイベントが開催されました。

十一月七・八日、伊勢市・みえサンアリーナでのグランドフィナーレに、博覧会協会はブースを出展。三重県下の皆さんに「ＥＸＰＯ２００５」をＰＲしました。

みえ歴史街道フェスタ

渋谷NHK前にチャップリン出現!?

「秋のふれあい広場」が、十一月三日に東京・渋谷のＮＨＫ放送センター前広場で開催されました。

博覧会協会は、ＰＲブースで会場空撮写真の展示や会場計画紹介ビデオの上映、アンケートなどを実施しました。

ブース前では、チャップリンのパントマイムなど大道芸人によるアトラクションを行い、多くの来場者にお楽しみいただきました。

隣接地区では「渋谷区民祭り」も開催。好天も手伝い、終日多くの家族連れでにぎわいました。

秋のふれあい広場

博覧会協会が現在使用しているこのマークは、誘致の際に制作されたものです。

発行　財団法人2005年日本国際博覧会協会　　発行日 1998年（平成10年）12月10日　編集責任者 大橋忠夫　部数 120,000部

〒460-0001 名古屋市中区三の丸二丁目６－１　三の丸庁舎７階　TEL 052-950-2005　FAX 052-950-2100
〒100-0011 東京都千代田区内幸町二丁目１－１　飯野ビル７階　TEL 03-5521-1601　FAX 03-5521-1607
インターネット・ホームページアドレス　http://www.expo2005.or.jp
「EXPOの耳」Eメールアドレス　voicebox@expo2005.or.jp

「EXPOの耳」あて先
◎ご意見をお待ちしております。

この印刷物の製作にあたっては、「競輪公益資金」の補助を受けました。

この印刷物は、再生紙（古紙含有率100%）を使用しています。

自然と人間とのさまざまな関係を構築する会場づくり

博覧会協会では、前回七月十七日に会場計画案について公表しました。その後、多くの方々から数多くの貴重なご意見をいただき、現在もさらに多様な視点から検討を続けています。

今回、新たなご意見をいただくために会場基本計画に関する会場計画プロジェクトチームの検討状況を公表しました。

主要地区（Aゾーン）計画のポイント

今回公表した検討状況では、博覧会会場の主な施設が設置されるAゾーンについて、どのように考えられているのでしょう。そのポイント・特徴などを紹介します。

自然を保全する計画

長期的地域整備事業者と連携して、限られた造成地を最大限に活用し、会場の自然をなるべく保全する会場計画とします。

自然に開かれた展示空間

「自然の叡智（えいち）」の理念を体現する空間の一つとして、自然の中に開かれた屋外型展示空間（領域型展示空間）を設け、そこにある自然と人間との間にさまざまな関係（インターフェイス）を構築します。

地形を生かした建築

建築は地形を生かした「トポス型建築」、さらに屋上部分を広場空間（トポス広場）とすることで、従来のパビリオン型より、はるかに少ない造成・伐採面積で、展示・広場空間を確保します。また屋上広場は、自由な展示空間づくりを可能とします。

立体ネットワーク型会場

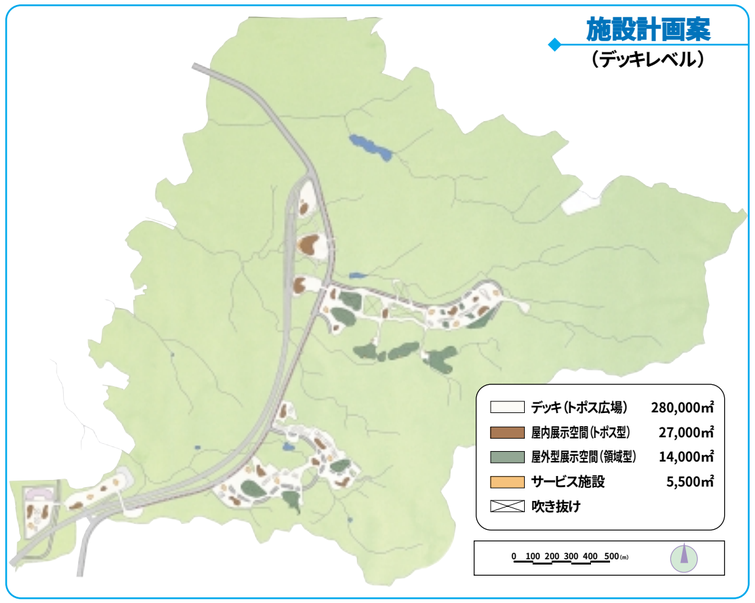
展示空間や広場を、地形の流れに沿って立体的に連続させていくことにより、従来の平面会場とは違った、立体ネットワーク型の会場計画とします。

従来とは異なる会場計画

地形を生かした建築（トポス型建築）や屋上広場空間（トポス広場）は、周囲の地形や道路とさまざまな関係（インターフェイス）を形成します。そうして従来の博覧会の典型であった、平地に林立するパビリオン型・ハコモノ型建築に代わる会場計画とします。

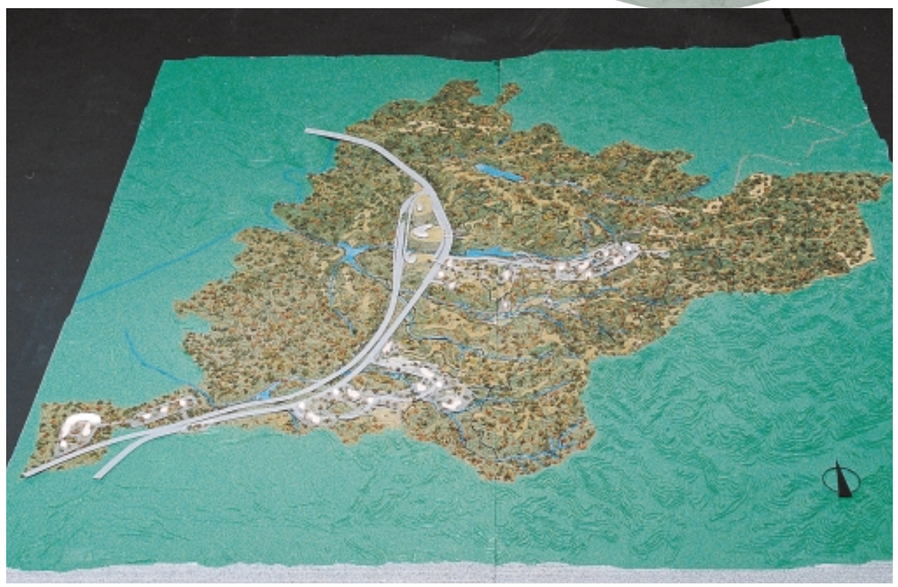
人に優しい会場づくり

今後、具体化されていく恒久施設の計画を取り込み、極力、施設の恒久利用を念頭に置いた検討を進めるとともに、高齢者や障害のある方にも優しい会場づくりを目指します。



海上池南側の会場イメージ図

屋外型展示空間のイメージ図


会場構想模型

会場基本計画策定における検討の経過について

前回七月十七日時点での会場計画案に対して、数多くのご意見をいただきました。そして、次のような経緯を踏まえて、今回の公表に至りました。

これらの考え方は前回と同様、検討段階のものですから、今後も多くの方々からのご意見を参考に、より良い計画にしていきます。

前回七月十七日に公表した案のポイント

①「自然の叡智（えいち）」を体現する空間として、森の中に屋外型展示空間（領域型展示空間）を設ける。
②屋内展示空間は、自然との新しい関係を生み出す観点から、地上に突出するパビリオン型の建築に代えて、凹状の地形を利用したトポス（場所を意味する古代ギリシャ語）型建築を導入する。
③森とのかかわり合いを体感できる（例えば、森の中に一定の標高を水平に回遊する回廊を設け、多様な高さの視点から里山を体感する）方法を検討し、観客の回遊を図る。

提案の後、多くの方々からご意見をいただきました。その一部をご紹介すると、

▽自然への影響という観点からは、

①森の中に作る屋外型展示空間は、植生への影響をもっと考えるべきではないか。
②凹状の地形を利用したトポス型建築は、水系への影響が大きいのではないか。
③水平回廊は森への影響が大きいのではないか。
――など。

▽発表方法、計画上の配慮に関しては、

①カタカナ言葉や難解な言葉が多く、内容が理解しにくい。
②もっと具体的な情報を多く流し、市民参加が出来やすいようにして欲しい。
③二千五百万人の入場者との面積的な対比が分からない。
④凹状地形の利用は、底を這（は）うようなイメージを受ける。
――など。

これらのご意見を踏まえて、会場計画プロジェクトチームで議論し、さらに長期的地域整備事業者とも連携し検討を進めた結果、次のような考え方が提案されました。

①生態系における水系の位置づけを踏まえ、より水系の保全に努める。
②主要施設の配置に当たり、北地区、南地区の地形特性を踏まえた施設の密度バランスを考慮し、二本の道路間地区の施設配置を検討する。
③屋外型展示空間の配置、凹状の地形の利用については、自然への影響をより注意深く検討し、配置計画について再整理する。
④道路建設の工程を踏まえ、道路上の歩行者デッキの設置は最小限のものとする。
⑤展示空間、滞留スペース、歩行空間、サービス施設、管理施設等の配置計画に留意するとともに、歩行者デッキ上にも自由な形の展示空間を配置する。さらに歩行者デッキ下部の滞留スペースに対しては、十分な吹き抜け空間を確保するなど、快適性を高める。
――など。

今後の検討方向について

今回の発表について、さらなるご意見を伺い、より計画の熟度を高めていくとともに、他のプロジェクトチームの検討と合わせ、会場基本計画の全体像を示すため、検討を進めていきます。今後の検討の方向については、次のように考えています。

「自然の叡智（えいち）」に合致した会場計画

対象とする「自然」の位置づけを明確化し、博覧会会場の成り立ち、また人間、建築、そしてさまざまな造作物と自然とのかかわり方を追求することにより、自然と人間とのさまざまな関係（インターフェイス）づくりを目指します。

たとえば、
＊立体ネットワーク型会場計画
＊屋外型展示空間
＊トポス型建築
＊水平回廊
――などにその考え方を反映させます。

総合的環境影響を視野に入れた会場計画

製造物のライフサイクルや二酸化炭素収支など、さまざまな環境に関する側面を検討し、総合的環境影響を視野に入れた会場計画を目指します。

たとえば、
＊リサイクル材の使用
＊燃料電池
＊伐採樹木の活用
――などです。

人に優しい会場計画

だれでも利用しやすく快適な会場計画を目指します。

たとえば、
＊動く歩道
＊木陰、水、風に配慮した空間
＊エレベーター等の垂直移動設備
――などを考えています。

計画時から会期後までが連続した会場計画

長期的地域整備事業への物理的、精神的な継承を考えた、持続継承型の計画を目指します。

たとえば、
＊施設の恒久利用
＊ゼロエミッションの思想
＊森林保全への参加
＊一過性ではない連続性のあるインフラ計画
――などです。

博覧会のソフトプログラムと連動する会場計画

トポス型建築、トポス広場、領域型展示空間のそれぞれの空間が、博覧会のソフトプログラムと連動し、共振するような会場計画を目指します。

環境面から「来るべき時代の実験場」を提案します

環境プロジェクトチームでの検討状況

環境プロジェクトチーム（リーダー…武内和彦東京大教授）では、来るべき時代の実験場として博覧会会場で、どのような環境面の取り組みを行っていくかについて、三つの部会（エネルギーシステム部会、ゼロエミッション部会、フィールド活用部会）を設けて議論しています。これまでの検討状況について紹介します。

フィールド活用部会

自然環境の特性を生かした会場づくり

フィールド活用部会では、自然環境の特性を生かした里山管理と自然とのふれあいをさまざまな角度から検討しています。主に博覧会会場の主要地区周辺の地域（B・Cゾーン）についてどのように展開していくかの議論を重ねています。

資源循環を支えるネットワーク

会場候補地の森は、薪林としての利用とその後の荒廃、復旧、保全という、長年にわたる人の関与により維持されてきた自然です。今後も、そうした森の特質を保とうとすれば、環境学習やバイオマスの面からの利用など、今日においても人と森がかかわっていくことができるしくみを創造していくことが必要です。

この視点で、国や地方公共団体、企業、市民の三者がそれぞれの役割を担い、人と森の新しい関係を築くためのさまざまな取り組みを進めていきたいと考えます。

種の多様性の維持と希少種の保護

種の多様性が維持されるしくみの中で、「ノー・ネット・ロス」の考えのもと、希少種の保護を図るシステムを提案します。「ノー・ネット・ロス」とは、現存する個体あるいは生息空間各々の保全ではなく、ある地域全体での個体数あるいは遺伝子数の総和の維持を図ろうという考え方です。

森の見せ方

森の見せ方のハードウエアとして、森の中に一定の標高を水平に回遊できる小道（水平回廊）を七月に提案しました。この回廊は水平になっており、高齢者や障害のある方にも森林体験の機会を提供します。また今回、森の魅力を引き出すソフト面からの方策として「環境体感プログラム」を提案します。これは、多様な情報媒体なども使いながら、森のどこ（なに）がおもしろいかを自ら体感できる環境を整え、広く社会に伝えることができないかというのものです。

このプログラムに参加した人が、会期中にはボランティアとして来場者を導いたり、会期後には森林管理の担い手になることも考えられるでしょう。

博覧会の資産継承

自然と人間の新たな関係を提示するという博覧会のテーマに沿って、会期終了後も後世に継承されるべき資産をつくることが重要との視点から、いろいろなアイデアを提案します。

具体的には、資源・エネルギープラント、自然史ミュージアム、生物多様性研究センター、環境モニタリングシステムなどです。

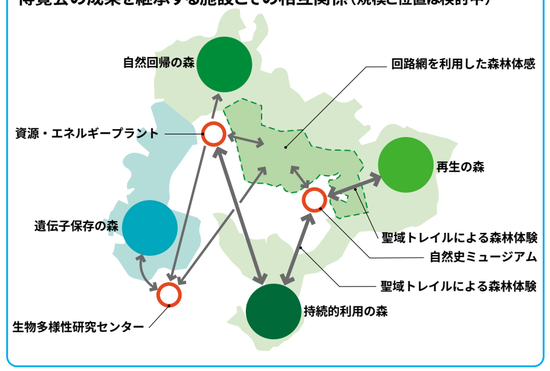
【資源・エネルギープラント】
二次林や人工林について、エネルギー源としての利用などを実験的に試みる拠点。

【自然史ミュージアム】
森の履歴や冶山事業などの保全の歴史、生態系としての特徴や価値を記録・公開し、人里に近い森の保全管理に関する研究と提案を行うための拠点。

【生物多様性研究センター】
生物多様性に係る国内の拠点的研究施設。

【環境モニタリングシステム】
巨視的スケールから微視的スケールまで、森とそれを取り巻く環境特性を観察し、森の機能を評価するシステム。

博覧会の成果を継承する施設とその相互関係（規模と位置は検討中）



水平回廊のイメージ図

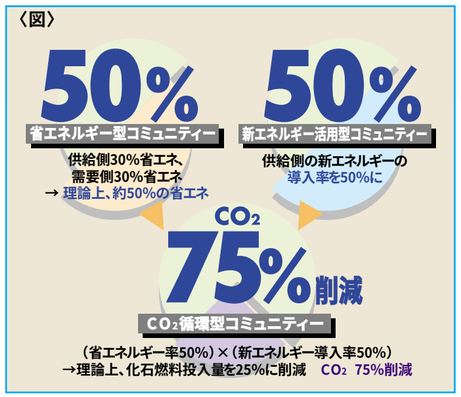
森林レクリエーションのイメージ写真

エネルギーシステム部会

最適エネルギー特別地域をめざす

エネルギーシステム部会では、博覧会会場におけるエネルギーシステムのあり方について検討を進めています。ポイントは、環境負荷低減に向けた具体的数値目標を掲げるとともに、革新的な技術の導入を図り、エネルギーシステムの未来図を描いていこうとするものです。

〈図〉



具体的な数値目標を

会場をエコ・コミュニティーの実験場にふさわしいものとするため、①50%省エネルギー②50%新エネルギー活用③$CO_2$75%削減――という、思い切った具体的な数値目標を掲げます（上図参照）。

水素循環型未来コミュニティー

革新的なエネルギー技術として、CO_2を排出しない究極のエネルギーを活用する「水素循環型未来コミュニティー」を提案します。

具体的には、ソーラー・水素システム、バイオマス、ゴミなどからの水素生成によって、自動車や燃料電池などが駆動するエネルギーシステムを会場で構築しようというものです。

ゼロエミッション部会

ゼロエミッションを実感できる博覧会をめざす

ゼロエミッション部会では、会場内でモノの循環を示すような製品の販売や施設などを通じて、多くの皆さんがゼロエミッションを実感できるような博覧会とするための検討を進めています。

目標の一つはゴミ処理量の最小化

会場の準備、会期中、会場の撤去の各段階で、ゴミ処理量を限りなくゼロに近づけるためのさまざまな検討を進めています。

①資源循環を支えるネットワークをつくります。

モノの循環のためには、会場内だけでなく、会場外においても資源化するしくみが必要となります。そのために地域連携や市民参加、環境に配慮する企業とのネットワークづくりを積極的に進めていこうと考えています。

②暮らしの中でのゼロエミッションを提案します。

来るべき循環型社会に向けてのライフスタイルの提案など、情報発信をすることによって、博覧会終了後も継承できるようなゼロエミッションを提案します。

③モノの循環を優先して考えます。

再利用（リユース）を優先し、資源化・リサイクルは次善の方法と考えます。もちろんゴミを発生させないことが第一ですが、リサイクルを行う場合は、モノのリサイクル（マテリアルリサイクル）を優先し、さらにエネルギーとして回収するサーマルリサイクルも検討します。新たな資源やエネルギー源としての活用にもチャレンジします。

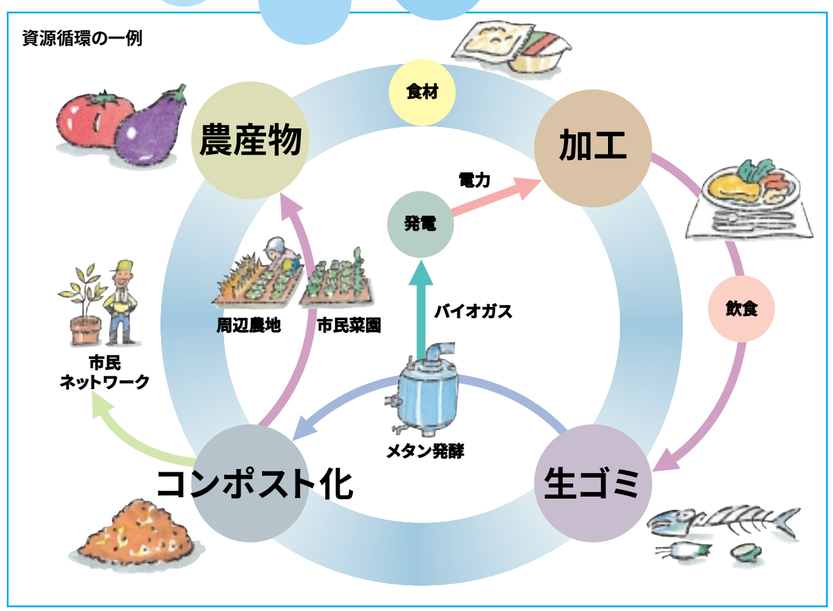
水循環の観点も検討

ゼロエミッションを進める中で、水循環も重要なポイントです。会場内で使用される水の循環など、より効率的な水利用も進めます。

ライフサイクルでの環境負荷の最小化

製品や施設の選定においては、その製造段階から廃棄まで（ライフサイクル）を考慮し、地球温暖化につながるCO_2の発生、大気や水質の汚染などの環境負荷を極力抑えていこうという視点で、検討を進めます。

資源循環の一例



EXPOキーワード

【バイオマス】
ここでは薪、炭など、エネルギー源として用いられる生物資源のこと。

【ゼロエミッション】
一般的に「廃棄物を各関係者の連携によって再資源化する『循環型』社会や技術」という概念のこと。

［環境プロジェクトチーム］

新エネルギー、省エネルギー、リサイクル技術の先進的な導入や自然を生かしたプロジェクトを企画・立案します

エネルギーシステム部会
新エネルギー、省エネルギー技術などを踏まえた将来の最適エネルギーシステムについて検討します

廃棄物のエネルギー活用方策など

生物系資源のエネルギー活用の検討など

ゼロエミッション部会
循環型社会の構築を目指したシステムを検討します

廃棄物の回収と利活用方策など

フィールド活用部会
自然環境の特性を生かした里山管理と自然とのふれあいを検討します